

イタリアへ侵入したクリタマバチと 日本産チュウゴクオナガコバチによる生物的防除の試み

中央農業総合研究センター ^{もり} 守 ^や 屋 ^{せい} 成 ^{いち} 一

イタリア・ピエモンテ州植物衛生局 Giovanni BOSIO

イタリア・トリノ大学農業科学部 Alberto ALMA・Ambra QUACCHIA・Luca PICCIAU

はじめに

クリタマバチ *Dryocosmus kuriphilus* YASUMATSU はクリの新梢に虫えいを形成し、樹体の成長と結実を著しく阻害するクリの重要害虫である。本種は中国原産と考えられており、日本では1941年に岡山県内で発見され、60年代中ごろまでに国内ほぼ全域に分布を急速に拡大した(於保・梅谷, 1975)。その間、各地の栽培グリや野生グリに惨害を与えた典型的な侵入害虫である。韓国では、1958年に中央内陸部に位置する忠清北道(Chungcheongbuk-do)で発見され(田村, 1962)、20世紀末までに全土に分布を広げた。さらに、1974年にはアメリカ東南部・ジョージア州ピーチ(Peach)郡に侵入し(PAYNE et al., 1976)、近隣の州へも分布を拡大している(ANAGNOSTAKIS, 1999)。そして、2002年にイタリア北西部のピエモンテ(Piemonte)州で多数のクリタマバチ虫えいが発見され、本種がクリの主要産地であるヨーロッパへ侵入・定着したことが確認された(BRUSSINO et al., 2002)。

1982年以降、日本国内では中国から導入された天敵寄生蜂チュウゴクオナガコバチ *Torymus sinensis* KAMUJO が順次各地に放飼されたことにより、多くの地域でクリタマバチの密度が低く抑えられており、伝統的生物的防除の成功例の一つとして知られている(村上, 1997; MORIYA et al., 2003)。そこで、イタリアでも日本と同様にチュウゴクオナガコバチを導入し、天敵寄生蜂の働きによってクリタマバチの被害を抑えることを目的とする生物的防除の試みが、2003年より開始された。本稿では、イタリアにおけるクリタマバチの侵入経過や近隣諸国を含む分布域の拡大状況を明らかにするとともに、日

本産チュウゴクオナガコバチの導入経過とその問題点について紹介したい。

I クリタマバチのイタリア侵入

2002年5月、イタリア・フランス国境の東側約50 kmに位置するイタリア北西部のピエモンテ州クーネオ県クーネオ(Cuneo: 図-1参照)近郊のクリ苗木業者の圃場からクリタマバチ虫えいが発見され、クリ大害虫未分布であった事実上最後のクリ産地、ヨーロッパ大陸へのクリタマバチの侵入・定着が確認された(BRUSSINO et al., 2002)。発見直後に実施された広域調査により、虫えいは初発見地点を中心にしてクーネオ県内の6地域から新たに発見され、2004年の分布域は既に160 km²に及んでいた。2005年にはピエモンテ州から離れたイタリア中南部のトスカーナ、マルケ、ラツィオ、アブルッツォ、カンパーニャ各州への分布拡大が確認さ

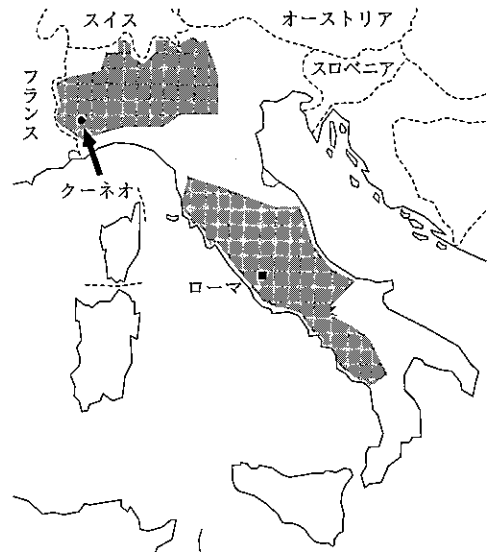


図-1 イタリア国内のクリタマバチ分布
2006年8月現在の州単位情報に基づく概略分布域。
矢印は最初に発見されたピエモンテ州クーネオの位置を示す。

Invasion of the Chestnut Gall Wasp in Italy and its Biological Control by using Japan-sourced *Torymus Sinensis*. By Seiichi MORIYA, Giovanni BOSIO, Alberto ALMA, Ambra QUACCHIA and Luca PICCIAU

(キーワード: クリタマバチ, チュウゴクオナガコバチ, 侵入害虫, 伝統的生物的防除, イタリア)